書　評

小田内隆
『異端者たちの中世ヨーロッパ』
（日本放送出版協会，2010 年）

上　條　敏　子

今日の日本で，俗に異端という場合には宗教上の立場と関係なく，主流派に対する反主流派程度の意味で，学界の異端児，などと用いられる場合には，独創性をさす賛辞として用いられることも多い。しかし，宗教改革以前の中世ヨーロッパでは，ことは違った。正統と異なる異端説を奉じることは身のおきどころをなくすだけでなく，財産没収や生命の危険に身をさらす，まさに命がけのできごとであったからである。しかし歴史的にみれば確固たる正統が異端をそういうものとして上から断じ，危なげなくラベリングを行い得ていた期間は以外に短い。『異端者たちの中世ヨーロッパ』は，その辺の事情にもふれ，非正統からみたキリスト教の可能性と葛藤の物語とも言える仕上がりになっている。本書の構成は以下のようである。

関連年表
序　章　異端からのまなざし
第 1 章　正統と異端の地平
第 2 章　「身体」をめぐる抗争 ── カタリ派二元論
第 3 章　「言葉」をめぐる抗争 ── ワルド派
第 4 章　「富と権力」をめぐる抗争 ── フランチェスコ会聖霊派とベガン
第 5 章　キリストのための戦い
終　章　権力の歴史へ

以下所感を交えながら，本書の内容を紹介したい。本書も指摘してい

るように初期中世以前の古代末期にはキリスト教のアイデンティティの確立をめぐる戦いがあり，キリスト教の正典としての新約聖書が成立するのも 4 世紀末のことにすぎない。それ以前には異なったイエス，異なった福音を主張する多くのカリスマ的指導者がいてそれぞれに異なるキリスト教を叫んでいたのである。

イエスの福音をめぐって初期には様々な解釈の潮流が存在し，生成期には複数の『キリスト教』の可能性があったことを端的に示すのが，2 世紀から 3 世紀にかけてのキリスト教史上最大最古の異端グノーシス主義の運動であった。グノーシス主義は，秘教的な知によって救済に達するという信仰によって危険視され，夥しい数の文書を輩出したが 4 世紀までに排除され，その後は歴史の闇に葬られた。ナグ＝ハマディ文書の発見によってその全貌が知られるようになるのは 20 世紀のことにすぎない。

そして，グノーシス主義を排除したあとのキリスト教は，三位一体論，キリスト論を核とする正統信仰を整えて行き，451 年にはカルケドン信条を定立する。また 4 世紀後半には，カトリック教会におけるローマ司教の首位権が広く受け入れられにいたる。ローマ帝国による公認，国教化もなされた。しかし，中世にはいるとヨーロッパ住民の大部分がローマ・カトリックの洗礼をうけながらなお異教的伝統に生きると言う状況をうけ，また識字率の問題もあり，教義論争が住民の間に広範な反響をもたらすといった光景はいったんなりをひそめ，中世に固有の異端の歴史は，11 世紀，教皇の首位権が現実の指導権として主張されるのをまつことになった。この過程では教会の刷新が問題となったが，著者によれば宗教が権力として発現する事態を迎えて中世に固有の異端の歴史が口火をきることになるのである。

むろん紀元千年前後からは都市を中心に異端が散発し，11 世紀後半には，教会改革者が，シモニア(聖職売買)，ニコライズム(聖職者の妻帯)を「異端」として問題にして「教会の自由」のためにたたかうという状況はあった。しかし，中世異端史のパースペクティブから見て，より重要な変化がこの間におきていたと著者は言う。著者の命名する不服従の異端の成立である。つまり信仰の問題にかかわりなくローマへの不服従を異端とみなしたことで，政敵，反逆者，偽誓者，不敬の言葉を吐く者，

高利貸し，性的逸脱者，魔術使いなど雑多なカテゴリーのひとびとに異端のすそ野は広がりえた。

小田内は，わけても，カタリ派，ワルド派，聖霊派＝ベガンの 3 つの異端は教会の真理の権威を根源的なレベルで脅かし，最も危険視された存在であったと述べる。本書が主に解説するのはこれら 3 つの異端で，かくして，第 2 章から第 4 章では，身体・言葉・富と権力という中世の教会がかかえていた「根源的葛藤」にまつわるトポスに注目しながら，これら 3 つの異端の選びの物語が語られることになる。「選び」とは，本書を通じて用いられる小田内固有の表現だが，噛み砕いて言えば，正統がつむぐ異端＝悪魔の陰謀のような物語に対して，異端の視点に立った物語があるという立場にたった命名で，異端者もよきキリスト教徒たることを自認して彼らなりに救いに至る道を模索して「選んで」いたという視点にもとづくものである。無論，異端者が何を考えていたかを知ろうとしても史料の多くは教会側にたった聖職者によって残されたものであるという問題がある。そのため異端者の選びの物語といっても，多くは異端に対する教会の応答に多くの頁をさかざるをえないが，異端が引き起こした波紋をたどることで，少なくとも正統と異端の対立が生じた歴史的コンテクスト，「トポス」が浮かび上がってくるだろうと小田内は言う。では，以下，トポスに注目しながら 3 つの異端の軌跡をたどることにしよう。

まず，カタリ派から。1143 年，ケルンの近郊で，キリストの足跡に従う使徒的生活の模倣者を自認しカトリック教会を否定する異端が出現した。彼らは，同時代の報告によれば，独自の教皇や司教を持ち，カトリックの秘跡を否定し，按手のみによる聖霊の洗礼をおこなっていた。これがカタリ派に関する最初の報告である。カタリ派は，善き精神世界と悪しき物質世界の対立という構図の二元論的世界観をもち，人間は，本来天使であったが，悪魔の仕業により失墜してこの世では肉体という牢獄に閉じ込められているのであって霊魂が身体から解放されることで救済が果たされると考えていた。この異端が，南仏で拡大をみてやがてアルビジョワ十字軍とよばれる異端討伐の惨劇を生んだことはよく知られていよう。さて，以下は，ここから浮かび上がる身体のトポスについての小田内の語り口である。12 世紀後半以降身体の解釈をめぐる葛藤のなか

から，（カトリック教会における）キリストの身体に対する新たな関心と，（カタリ派における）二元論的解決という両極化が生じたが，カタリ派もカトリック教会も，実際には，産み育て，欲望し，腐敗する身体という同一の身体イメージの地平にたっていた。すなわち「中世人の世界観ではあらゆる変化は衰退で」，「アダムとエバの原罪にはじまり，キリストの受肉から肉体の復活まで，救済とは罪と死に対する勝利にほかならず」「中世の身体観の奥深くには，自然の変化する過程に対する根深い不安が存在していた。」「滅びるべき身体と共に『人間』も無に帰すのかと」。（第 2 章第 2 節）肉体という牢獄から解放された魂が天国に戻っていくという救済観をもっていたカタリ派が，滅びるべき身体と共に『人間』も無に帰すのかと，恐れていたのか若干疑問であるが，ともあれ，このような語りの延長線上で，12 世紀から 13 世紀にかけての聖体信心の発展はカタリ派二元論に対抗するものとして位置づけられる。また，カタリ派に対するアルビジョワ十字軍は，武力制圧によらなければヨーロッパ全土が汚染されるという恐怖感によっていたと説明され，しかもその恐怖は実体的な脅威に由来するものではなく迫害をうんだエリートが抱いたイメージ（ママ）に由来するものであったことが R. I. ムアの研究を典拠として主張され，カタリ派が対立教会を組織していたとの旧来の説は否定される。

次なる第 3 章が扱うのはワルド派である。リヨンの富裕な市民ヴァルデスによって 12 世紀に開かれたワルド派は，吟遊詩人が語り聞かせる聖アレクシスの物語に感銘をうけたヴァルデスが，「もし完全になりたいのなら，行って持ち物を売り払い，貧しい人に施しなさい」という福音書の言葉を文字どおり実践し，清貧の生活にはいったところからはじまる。そこで彼がはじめたのは，聖書を俗語訳で読んで人々に説教を行うことであった。この一般信徒による説教という未曽有の事態は同時代の聖職者の露骨な反感をまねいた。教皇アレクサンデル 3 世のはからいにより，ヴァルデスの一味は大司教の事実上の認可のもとに当面は説教活動を続けることができたものの，教皇の死去と大司教の交代ののちはリヨンの町から追放され 1184 年には異端宣告を受けることになるのである。

さて，ヴァルデスらの説教活動が問題視されたのは，キリスト教が神の言葉が受肉したキリストへの信仰であったということもさることなが

ら，グレゴリウス改革によって聖職者の司牧的役割が強調されるようになって説教権の独占が「アクチュアルな問題」になっていたからであった。ただしワルド派をめぐる問題には，聖職者とそれに従う一般信徒という二項対立的な図式に還元できない複雑な様相もあった。ヴァルデスらは異端宣告をうけたのちも一般住民に受け入れられて説教活動を続けていたし，一派には明らかに少なからぬ聖職者や学識のある者が加わっていたのである。この点に注意をうながし，小田内は，ヴァルデスの問題をリヨンのローカルな教会の枠組みの中で解釈しなおそうとした最近の研究を紹介する。それによれば，リヨンでも教会改革がきざしていたが，教会財産を私有化し蓄財に熱心な「貴族」「有力者」「大物」から改革に強い反対があったのに対して，「より卑しき者たち」「より小さき者たち」は利得心をもたず，リヨン教会に奉仕していたという。この後者こそがヴァルデスのグループをさしたのではないかというのが最近の研究なのである。(第 3 章第 2 節)

グレゴリウス改革後の教会は「使徒的生活」への呼びかけを共通のスローガンとする改革精神に呼応しつつ新しい社会にふさわしい「新しい言葉」を模索しておりワルド派はその試金石となった。初期には吠えない犬と化していた聖職者に対して荒野の声としての価値を認められていたワルド派に開かれていた言説空間は，しかし間もなく閉ざされ，最終的にワルド派は不服従の異端として周縁で生きることを余儀無くさせられることになる。

第 4 章は，フランチェスコ会聖霊派とベガンを扱う。問題となるのはフランチェスコ会の清貧論争である。ヴァルデスの回心から約 1 世紀後，同じように私財を放棄して貧者に与え福音説教をはじめたフランチェスコの仲間たちは，教皇の認可を得て，汎ヨーロッパ的な修道会として成長をとげた。しかし，フランチェスコがめざした文字通りの清貧を大きな組織となった修道会が維持するのはむずかしく，まもなくフランチェスコ会内部ではいわゆる清貧論争が起きることになる。「富と権力」をめぐる矛盾・葛藤をトポスとした異端の発生である。

すでにフランチェスコの晩年，教皇グレゴリウス 9 世とインノケンティウス 4 世は，財の「使用」と「所有」という概念を巧妙につかい，財の所有は放棄されなければならないが，使用は認められるという解釈

をうみだした。この解釈によってフランチェスコ会の無所有の原則は，形式的には守られたし，ボナヴェントゥーラの時代までは使用もミニマムであるべしという節度ある解釈が主流をしめていた。しかし，やがて無所有が建前となり托鉢修道士たちが豪奢な服と食事，壮麗な教会を享受する姿があたりまえのようになると，会の内部では清貧の解釈の緩和の道を探る指導部と，フランチェスコの理想に忠実であろうとする少数派の間に亀裂がうまれるようになる。前者がコンヴェントゥアル派，後者が聖霊派である。この論争のなかで主要な位置を占めたのが，財の使用における貧しさがなければ清貧の名に価しない，として聖霊派の理論的支柱となったペトルス・ヨハンニス・オリーヴィであった。この世の財への執着を捨てることで霊的に自由になることができると説いたオリーヴィの影響力は強く，修道会のみならず，キリスト教世界全体をゆるがす事態に発展する。すでに 1280 年代には両派の対立は激化しており，1309 年には教皇が介入するほどであった。さらに，1316 年，新たに教皇に選出されたヨハネス 22 世のもと，清貧の象徴である「短い僧衣」をきた聖霊派の 61 人が名指しされてアヴィニヨンの教皇庁に召喚され，主流派の清貧の解釈をのむことをこばんだ 20 人が異端審問にかけられるが，事態は，不服従を貫いた 5 名が異端とされ，1 名が終身禁固刑に，残る 4 名は火刑に処せられるという衝撃的な結末を迎える。そしてこれに続いて，聖霊派の残党と聖霊派に共感していた一般信徒などベガンに対する異端審問の火ぶたがきっておとされることになったのである。

教会にとって聖霊派が脅威だったのは，彼らの間に聖霊の時代の到来を予言したヨアキムの教説がひろまっており，彼らこそが，聖霊の時代を切り開く修道会であるとの待望論が一般に広まったためであった。この教説の盟主がオリーヴィであり，その影響力は彼が 1298 年に没するや，ただちにオリーヴィ崇敬の熱狂がおきたほどであった。オリーヴィ自身は，ローマ教会を富と権力におぼれた肉的教会とみなしながらも教皇の権威を否定はしなかったと考えられている。しかし，ベガンはオリーヴィの想定をもこえてローマ教会は霊的教会にとってかわられるべきとみなしはじめていたから，ここに教会改革の一線がこえられ異端への道が「選ばれる」ことになった。

第 5 章キリストのための戦いでは，再び異端概念に戻り，宗教運動か

らうまれた選びのすそ野に広がる不服従の異端に目がむけられる。ここで小田内は，不服従の異端の地平では，異端の内実よりも教会との権力関係が一層重要な意味をもってくることを指摘し，政治的な理由で異端とされた例を紹介する。1140 年代から 1230 年代までに，教会は物理的暴力と象徴的暴力とを結び付けることによって，迫害の心性を組織化することに成功した。そこに紡ぎだされるのは反逆罪という権力の悪夢であり，異端の危険は主のぶどう畑を荒らす子狐としてアレゴリー化され，異端者の禁欲はイマジネールの中で逆転されて，近親相姦・同性愛・自慰など性的なタブーを侵犯する者となり，キリスト教世界を穢すものとなった。

終章では，中世にも様々な可能性のあったキリスト教に思いをよせながら，中世の異端の歴史の波紋をまとめる。異端審問制度の創出は，中世をこえてヨーロッパの発展を内部から規定することになったし，オリーヴィを崇敬し，そのヴィジョンに従ったベガンの悲劇は教皇の至上権に対する根深い不信感をあとに残すことになり中世キリスト教世界の統合のゆるやかな解体の歩みがはじまることになろう。17 世紀までに世俗国家は最終的に教会から分離し，教会は社会のイデオロギー的統制の表舞台から撤退した。それとともに，異端という言葉からも迫害を生みだす力が失われ，カトリック批判の文書の方がカトリック側の文書を量的に凌駕するといった現代における言語状況には中世とは隔世の感がある。

以上が本書のおおよその内容である。トポス，アポリアなどの一般になじみのあるとはいえない用語を多用する著者の論理展開を限られた紙面でどれだけ紹介できたかは心もとないが，聖霊派＝ベガンのようにこれまで，国内ではほとんど紹介のなかった異端の内実について最近の欧米の研究を摂取して紹介してくれているのはありがたかった。異端研究には，異端者側が残した史料がほとんどないという史料上の限界があり，まとめるのが困難とみなされてきたが，言語論的展開とよばれる人文諸科学における方法論上の展開をへて近年異端研究は盛況を呈している。本書は，そうした近年における欧米の研究を積極的にとりいれており，さらにトポスという概念を持ち込むことで，正統と異端の間で共有されていた信仰と教会のあり方に関する矛盾と葛藤やその解決の仕方を描き，

それをもって中世にカトリック教会と異端の間でくりひろげられたドラマを描き出すことに成功している。これは従来の異端に関する概説書が，ともすれば異端の教説の網羅的解説に重点を置く傾向にあった事に照らしあわせると斬新な試みといえるだろう。最近の研究を摂取することで，従来の研究で常識とされていた説を書き換えている部分も少なくない。ヴァルデスが商人ではなく，リヨン教会の管財人であったとした箇所などである。ベガンについては長くまとまった研究がなかった。紹介したことそのものが功績といえよう。しかし，従来の研究を書き変えようとするあまり功を焦ったと見られる箇所がないでもない。カタリ派については我が国でも渡邊昌美氏による堅実な研究があるが，そこでも語られているカタリ派教会を著者がいうように否定してよいものかどうかは疑問が残った。また副次的な問題であるが，日本語が咀嚼されていない箇所が見受けられる。303 頁の異端的主体はわかりにくい。subject の訳語であるとすれば，異端の罹患者，つまり，異端に染まった者と言うほどの意味であり，よりこなれた表現であればと惜しまれた。302 頁のキリスト教的主体についても同じである。意味するところは信仰を内面化したキリスト教徒であろう。トポスという言葉についても説明がないままつかわれ本書の後半でようやく，場といいかえられているが，むしろ言語空間，特に信仰上の熱い思いが交錯する磁場のようなものとして用いられているようであった。一般向け図書の体裁をとる本書だけに，より平易につづられていればと惜しまれる。

わかりにくさと類似する問題として，海外文献の紹介のしかたに若干の問題があるようにかんじた。ムアを紹介した箇所で小田内氏が素朴にエリートのイメージとした箇所は，原書ではエリートによるイメージ戦略とでもいうべき作為的誹謗が問題になっており，エリートの演じた役回りとそれを必然とした社会構造の議論におおきな隔たりがでてしまっている。

またより根源的な問題として，異端の定義の問題をあげておく。冒頭部分の異端の定義とは別に，本論中には，中世の人々が異端となることを選んだとする箇所がある。こうした物言いのあり方は，渡邊昌美氏がずっと以前にいいきっている，正統が異端としたものが異端となるというあたりまえすぎるけれど普遍性のある定義に比較して優位性があると，

この時代についていえるのかは大きな疑問であろう。たとえば，あのサザーンにも『西欧中世の社会と教会』のなかで，救いにいたる別の道があるのではと考えた人々がいた云々の記述はある。しかし，そうした見方をいたずらに敷衍することが妥当なのか。ルターやヘンリー８世のしたことであれば，ローマと異なる道をえらんだということで問題はないのだろうが，宗教改革以前と以後では，異端をめぐる状況はあまりにも隔たっていると思われるのである。そうした視点を涵養するという意味でも，宗教改革期，ルター派とカトリック教会は相互に相互を異端とののしりあっていたという重い事実には触れてほしかった。

いろいろ述べてきたが，論じかた次第では，異端研究には，歴史学の新しい可能性があるように思う。教理に比重をおきがちな小田内氏の叙述からはみえてこない，異端をとりあげることで当該社会がどのように見えてくるかという本書であまりとりあげられていない問題については私自身の今後の課題としたい。